

## 私たちのお茶席

長野県屋代高等学校2年（長野県）

長田 真奈

夏が始まろうとしていた5月。私達は悩んでいた。今年の文化祭は一味ちがった。一つは、今年は私達2年生が主体となり行う初めての文化祭という点で。もう一つは、班長として迎えるということだ。リーダーシップをとるのが苦手で、自分の考えを言わずに過ごしてきた臆病な私。「どうしよう」「何でもいいよ」と人に頼りすぎてきた私。しかし、先輩に任せていただいたことが嬉しく、私にできることを懸命にやりたいと思った。自分を変えたい。1年前、班長をやることを決意した。

だが、現在、3年生の先輩も、1年生の後輩もいない。私達2年生、たったの3人だけだ。お茶席は3人で出来るのだろうか。私の頭の中は沢山の問いと不安で溢れた。諦めるしかないのか…？しかし、私達全員の思いは「やりたい」、その一択だった。人数やコロナの関係でお抹茶を差し上げることができなくても、場所が狭くても、私達の茶道を多くの人に伝え、気持ちを届けたかった。沢山のの方々のおかげで例年通りに行うことに決まり、その後の日々では、会場整備、お道具の用意等々、みんなで議論し、準備を重ねた。

そして、当日。小さい子供から大人まで、幅広い世代の方が私達のお茶席に参加して下さった。初めて人前でお点前を披露し、とても緊張したけれど、茶道を通して初対面の方々とも同じ時間を共有し、心が繋がった気がした。あの瞬間は忘れないだろう。

文化祭は成功を収めた。この一日を迎えるまでに沢山の葛藤があったからこそ、得た達成感は大きかった。本音で話し合い、仲間と共に作り上げたお茶席を通して、人として前よりも成長できたような気がした。班長としても最後までやり遂げられることができ、昔の私から変わったような気がした。発表が成功できたのも、普段から丁寧にご指導して下さる先生と、困ったとき親身になって相談に乗って下さる顧問の先生、そして共に茶道に励む仲間がいてくれたからだと思う。感謝の気持ちをどんなときも忘れないこと。これは茶道から学んだことだ。

私が今の仲間と茶道ができるのもあと1年しかない。「茶道」を通して出会うことができた方々との繋がりに感謝して、日々お稽古に励んでいきたい。私は大学でも茶道を続けたいと考えている。出会いの大切さ、感謝の気持ちを教えてくれた茶道。悩んでいるとき不安なときに心を落ち着かせてくれた茶道。この茶道の素晴らしさがこれからも多くの人の心に届いていくことを願う。

そして、私は今日も茶筌を振る。